

「日本国憲法」前文 その1

日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたって自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであつて、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する。これは人類普遍の原理であり、この憲法は、かかる原理に基くものである。われらは、これに反する一切の憲法、法令及び詔勅を排除する。



「日本のカトリックはせめてあなた方の持っている自由をよく使ってください」*1

■ 古屋敷一葉（援助修道会）

私は2014年夏に韓国で行われた、アジアニュースデーに参加し、韓国カトリック教会の大きさと力を感じました。この力はどこから来るのだろうかと思ひ、韓国カトリック教会の歴史についての本を読み始め、歴史を追う中で、ひょっとして、ある時代に教会が信頼を得て信徒が増えたのではないかと思います。それは1970年代から80年代にかけてのいわゆる「民主化運動」の時代ではないかということです。この時代の韓国の教会の動きを見ることによって、その答えが見えてくるのではないかと思います。ところが、調べるうちに、意外にも（失礼）日本の「正義と平和協議会」（以下、正平

協）が、当時、韓国国内の動きを日本や他の国々に知らせる大きな役割をしていたことがわかってきたのです。

1970年代、韓国はパク チョンヒ政権のもとにありました。彼は憲法を改定して大統領に権限を集中させ、緊急措置を次々と発動し、意のままに政治を行いました。彼は韓国の飛躍的な経済発展を実現させたとも言われますが、経済優先の政策のために苦しむ人々もいました。都市に人口が流出し農村に残された人々、開発の